

# ベテラン農民工の職業的「終着点」

配信日：2026 年 05 月 26 日

元記事リンク：[https://www.sohu.com/a/1027673608\\_121218495](https://www.sohu.com/a/1027673608_121218495)

掲載ウェブサイト：[www.sohu.com](http://www.sohu.com)

著者：齊魯晩報・齊魯壹点

テーマ分類：労働者の置かれた状況

コンテンツの種類：深掘り報道、またはノンフィクション

キーワード：日雇い市場、仕事、ボス（雇い主）、日雇い労働者、施主、日給 対象業界：建設業 対象職種：ブルーカラー雇用労働者

場所：なし

関連する議論：雇用、柔軟な働き方／ギグエコノミー／プラットフォーム労働、労働仲裁・提訴、賃金報酬、賃金未払い

## 【要約】

- 高齢の移住労働者（農民工）が都市の日雇い市場で仕事の機会を待っている。年齢やスキルの制限から安定した雇用を得ることが難しく、多くの人が知人の紹介や現場での「運頼み」で仕事を獲得せざるを得ない。しかも仕事が多く人が多いため、競争は激化している。
- 日雇い仕事の多くは臨時の一回限りの仕事で、絶大多數の労働者は労働契約を結んでいない。給与の精算は主に口頭の約束に頼っているため、賃金未払いの解決は困難。労働仲裁のプロセスは複雑で、契約書という裏付けもない。
- オンライン求人プラットフォームが普及した後、多くの年配の労働者は操作ができなかったり、オンライン上の提示額が低すぎたりして、ネット経由で適切な仕事を得ることが難しくなっている。彼らは主にオフラインの市場や伝統的な人脈に依存している。
- 賃金の未払い現象は普遍化しており、労働者が給与を請求するには自分自身で手配師や施主と交渉しなければならない。悪質な未払いに遭遇した際のコストは高く、一部の労働者は数万元（数十万円相当）にも上る給与を長期にわたって回収できない。
- 高齢の農民工は社会保障を欠いており、故郷に帰っても基本的な生活を維持することが難しく、都市に残れば正規の労働市場から疎外されてしまう。日雇い市場は、彼らが生活を維持するための最後の選択肢となっている。

※以上の概要はシステムによって自動生成されたものであり参考用です。使用する場合は原文と照らし合わせて確認してください。

## 本文

5 月のある日、午前 5 時半。北京市昌平区の北七家建材城（建築資材市場）の十字路には、すでに 10 数人の日雇い労働者が仕事を待っていました。彼らの年齢は 50 代から 60 代で、リュックサックを背負い、速度を落として通り過ぎる車の一台一台に鋭い視線を送っています。それが、彼らにとって 1 日の中で唯一の仕事のチャンスかもしれないからです。

午前 7 時になると、労働者はますます集まり、その数は 60～70 人に達しました。しかし、労働者を募集しに来た車は、わずか 2 台だけでした。

「来ても無駄だと分かっているし、全く仕事なんてない。でも、万が一仕事があるかもしれないと思って・・・」。労働者はため息をつきながら言いました。「だけど、その万が一なんてない。みんなここで時間をすり減らしているだけ」。別の労働者は苦笑しながら、「鍛えられるのはメンタルだけだよ」と皮肉交じりに言いました。

## 都市の片隅で待つ

5 月 1 日からの 11 日間で、周文青（ジョウ・ウェンチン）さんが働けたのは、わずか 1 日半だけでした。

労働者たちはやることがなく、雑談を交わす中で、周文青さんは「丸 1 ヶ月間、全く仕事が見つからなかった人もいる」という話を耳にしました。「誰に聞いてもみんな仕事がないんだ」。それでも周文青さんは、毎朝 7 時半に正確に市場に現れます。自分を売り込む看板を広げ、折りたたみ式の小さな椅子を取り出して、正午の 12 時まで座り続けます。それから電動バイクで家に帰って昼食を作り、食べ終わると再び市場に戻って見守り、太陽が沈むまで待ち続けるのです。

周文青さんは住宅の内装（リフォーム）に 40 年間従事してきたベテランの職人。58 歳、河南省周口市の出身です。若い頃、2 人の息子も彼を追ってこの業界に入りました。親子 3 人は北京市昌平区北七家鎮の西沙各庄村で、家賃月額 950 元（1 元約 20 円）のワンルームを借りて暮らしています。そこは北七家家具市場・建材城から 2 キロメートル離れた場所にあります。

北七家建材城は北京北部地区における大型の家具・建築資材総合市場の一つであり、その周辺には自然発生的に日雇い市場が形成されました。労働者の多くは河北省や河南省の出身で、遠くは甘肅省や東北地方などから来ています。建材城は午前 9 時に営業を開始しますが、ここで仕事を請け負う労働者たちは、その時間まで待つことはできません。

5 月中旬のこの日、午前 5 時半、空はすでにすっかり明るくなっていました。建材城から 500 メートルほど離れた十字路には、すでに 13~14 人の労働者が路肩に立っていました。

午前 6 時、1 台の自家用車が交差点に止まると、7~8 人の労働者が一斉に群がりました。手配師がまず、どんな職種が必要か、何時間働くか、日給はいくらかを提示し、労働者は市場の相場や自身の希望額を踏まえて希望価格を提示します。双方の条件がまとまると、労働者はその場で雇い主の車に乗って出発していきました。



朝 6 時、建材城附近の十字路には十数人の労働者がいた

「7 時前ならまだ仕事に行ける可能性があるが、それを過ぎるともう行くのは難しい」。ある労働者がぼつりと言いました。しかし、7 時になっても、条件がまとまって雇い主と共に去っていったのは、わずか 2 人の労働者だけでした。

朝の通勤ラッシュが始まり、日光はますます眩しくなっていきます。身の回りを歩行者や車両が絶え間なく行き交い、誰もが足早に通り過ぎていく中、彼らだけが焦燥感の中で待ち続けています。

多くの人は昼頃になると、本当に仕事がないと諦めて帰っていきますが、王景明（ワン・ジンミン）さんはよく早朝の 5 時から夕方 6 時までここで待ち続けます。

王景明さんは 66 歳、故郷は河北省邢台市。彼は市場から 4 キロメートル離れた小湯山鎮の馬坊村に、月額 600 元の部屋を借りて住んでいます。毎朝 4 時過ぎに起きて朝食を作り、その後 40 分間バスに揺られて市場にやってきます。電動バイクを持っていないため、昼食は市場の近くで適当に済ませます。

王景明さん曰く、仕事が見つからない日は、毎日お金を失っているのと同じだといいます。1 日の家賃、光熱費、食費を合わせると最低でも 60~70 元（約 1300~1500 円）はかかります。「これでも贅沢なものは食べないようにしているんだ」。以前、四環路の内側（市内中心部）へ仕事に行った際、彼はバッグにインスタントラーメンを忍ばせていました。市内の飲食店では、ラーメン 1 杯が一番安くても 20 元以上し、高い割にお腹いっぱいにならないからです〔インスタントラーメンは 2-3 元で買える〕。

王景明さんは、ここ数年仕事が見つかりにくくなっている主な原因は、やはり建築・内装業界の景気が冷え込んでいることにあると考えています。また、建築・内装のあらゆる品目を網羅するオンライン求人プラットフォーム



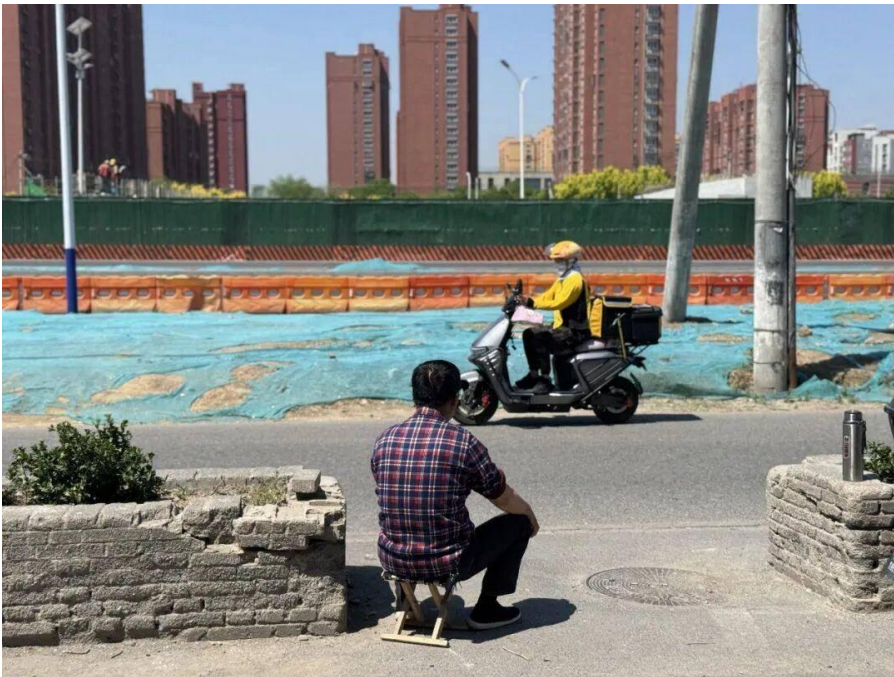
ムの台頭も関係しています。彼は文字入力の操作ができず、オンラインでの仕事を見つける際のルールもよく分かりません。

周文青さんはかつて、あるプラットフォームで 20 元を支払って会員登録をしたことがあります。カスタマーサービスからは「1 週間連続で広告を掲載し、正確なマッチングを行う」と約束されましたが、彼のもとに届いたのは、河南省平頂山市の施主からの電話でした。北京からは遠すぎて諦めるしかありませんでした。

周文青さんがオンラインでの仕事探しを完全に断念した決定的な理由は、同じ内容の仕事であっても、プラットフォームの提示額がオフライン（対面）市場より一律 100 元以上も低いことに気づいたからです。彼が得意とする塗装工を例に挙げると、北京のオフライン市場の相場は 1 日最高 600 元に達しますが、プラットフォーム上の提示額は最高でも 450 元しかなく、実に 4 分の 1 も少なかったのです。

王景明さんや周文青さんのような高齢の労働者にとって、生計を維持するための主なルートは、今でも顔なじみの手配師からの口頭での紹介に頼るしかありません。

景気が良かった頃、周文青さんは休む暇もないほど忙しく、数日間の休みが欲しいと願うばかりでした。しかしこの 2 年間、建築・内装業界はますます不振に陥り、手配師自身の手元にも仕事がなくなってしまいました。業界に入って 40 年、今年の 5 月に周文青さんは初めて日雇い市場に「出店（看板を出して座ること）」し、運を天に任せることになったのです。



座って仕事を待つ周文青さん

人が多く仕事が少ないため、仕事の奪い合いになることは日常茶飯事です。この日の午前、ある手配師が労働者を募集しに市場へやってきました。周文青さんは急いで駆け寄り、手配師と交渉を始めました。しかし、その最中に突然、別の職人が横から割り込んできて、周文青さんよりも低い価格を提示したのです。手配師はすぐに振り返り、後から来たその職人と仕事を決定してしまいました。

「自分と話しているのに、他の人が横取りすべきではない。あの人はルールを分かっていないんだ」。周文青さんは温厚な性格のため、それ以上は深く気に留めませんでした。彼が言うには、以前、2 人の労働者が仕事の奪い合いから大喧嘩に発展し、片方が肩の骨を折られたり、警察沙汰になったりしたこともあるそうです。

## 「身分証明書を出したとたんに、『さようなら』だって」

北七家の日雇い市場にいる労働者は、大きく 2 つのタイプに分けることができます。1 つは、建築現場から流れてきた「手伝い（雑役工）」です。多くは、レンガ運び、泥こね、ゴミの清掃・運搬といった純粋な肉体労働を行っています。体力を頼りに生活しており、仕事は雑多で技術的な付加価値は低く、収入も比較的少なめで、日給は 200～300 元（約 4300～6500 円）程度です。

このタイプの労働者の年齢は、一般的に 55 歳以上に集中しています。年齢制限を超えると正規の建設現場に入れなくなり、安定した仕事を失います。そのため、固定の年齢制限がなく、その日のうちに報酬が精算されると

いう特徴を持つ日雇い労働が、彼らにとって数少ない生計を立てる選択肢となっているのです。

河北省衡水市出身の朱同川（ジュー・トンチュアン）さん（56 歳）は、現場を離れた後、他の仕事を探そうと試みました。しかし、日雇い労働以外は基本的にすべて年齢で落とされてしまいます。「身分証明書を出した瞬間、『さようなら』と言われるんだ」。

もう 1 つのタイプは、周文青さんのような「熟練職人」です。彼らの大部分は、内装業界で何十年も揉まれてきており、確かな技術をその手に握っています。「万能」とも言える彼らは、精密内装、パテ塗り、塗装、天井吊り、壁タイルの貼り付け、水道・電気の改造など、かつてであれば仕事に困ることはありませんでした。しかし、業界の変化に伴い、手配師たちに仕事があっても若い労働者が優先されるようになり、これらの年齢を重ねた技術職人たちも、市場で「手伝い」たちと一緒に仕事の機会を待つためにしゃがみ込まざるを得なくなっています。

技術労働者たちは、自分がこなせる職種の一覧を印刷した広告看板を掲げ、その末尾に携帯電話番号を添えています。

周文青さんは自分の看板を指差しながら、ここには多くのこだわりが詰まっていると語りました。最初の行にある仕事は最も得意とするもので、まさに生計を立てるための本領です。彼は塗装とパテ塗りを主力としています。後ろの方に列挙されている真石漆（天然石調シート・塗装）や天井吊りなどは、前の技術ほど精緻ではないものの、落ち度のないレベルであり、一般的な住宅の内装に対応するには十分なものです。



#### 周文青さんの広告

住宅内装業界の日給は、職種、スキルのレベル、および地域差によって決まります。周文青さんが得意とする塗装を例にとると、北京などの一級都市では、技術の熟練した内装塗装工の日給は一般的に 400～500 元前後です。もし調色、アート塗装、異形構造へのスプレー塗装といった複雑な工程が関わる場合、日給は 600 元（約 1 万 3000 円）に達することもあります。

住宅リフォームの日雇い市場にいる女性労働者の大半は、清掃員や単純労働の作業員であり、高樹琴（ガオ・シューチン）さんのような技術職人は滅多に見られません。

高樹琴さんは河北省邯鄲市の出身で、50 代。10 年前到北京へやってきて住宅内装の仕事を始めました。彼女の父親が木工職人だったため、彼女もまた「釘を打ち、ハンマーを叩き、ナイフや鋸（のこぎり）を握る」生活を選んだのです。

働き始めた当初、彼女が「手伝い」として働いていた時は、男性労働者がやりたがらない仕事、例えば掃除や資材の分類といった細かい仕事しか見つけれませんでした。「私は彼らの（やり残した）隙間を狙ったの」。

毎日プロの職人と一緒に働いているうちに、時間が経つと彼女も「手がうずうず」して、技術を身につけたいと思うようになりました。通常は「隣にいる人の技術をそのまま学ぶ」スタイルでした。木工職人と一緒にいる時は、床を掃きながら相手がどのように面取り（角の処理）をしているかを観察しました。塗装職人のアシスタントを務める時は、見ながら記憶し、珪藻土をムラなく塗るためのコントロールや、彫刻が施された木製装飾面へのスプレーガンの動かし方を学びました。

こうして、彼女は雑用をこなす「手伝い」から、一人の職人として自立できる「親方」へと成長し、それに伴っ



て収入も増えていきました。

ただ、現在の状況下では、仕事を選び好みできる人はいません。高さんも例外ではなく、ある仕事は何でもこなします。

数日前、彼女は「手伝い」の仕事を引き受け、1日で280元を稼ぎました。多くはありませんが、気楽にできるのが魅力でした。「そのベテラン職人は、私のことを（力仕事の要員ではなく）ちゃんと女性として扱ってくれたんだ」。高さんはそう言って、からっと爽やかに笑いました。「私のことをまだ女性として見てくれる人がいるなんてね」。

一方で、彼女を「女性扱いしない」仕事は、本当に過酷ですが、その分日給も高くなります。もっと前には、彼女は80斤（約40kg）のセメントや95斤（約47.5kg）の大理石を運んだこともあります。「私たちの体力は1日で身についたものじゃないよ」。高さんの話すスピードは速く、言葉の端々に力強さがあり、自信に満ちあふれていました。周囲の驚きの視線に対しても、彼女は気にする様子はありません。「人それぞれ体力は違う。大の大人の男だって、仕事ができないやつはたくさんいるんだから」。

2日前、周文青さんの妻から電話があり、リタイヤしたら故郷に帰ってくるようにと言われました。妻は「いつもここで時間を無駄にしているわけにはいかない」と言いますが、彼は帰りたくありません。

以前、周文青さんが外で熱心に働いていた頃は、年間で7万～8万元を稼ぐことができ、過去5年間でも、基本的には3万～4万元を蓄えることができていました。彼は、現在の市場環境がどれほど悪くとも、故郷に留まっているよりはるかにマシだと考えています。

彼の身分証明書上の年齢は、実際の年齢よりも4歳高く記載されています。2年前、身分証明書上の年齢が60歳に達したときに、彼は一括で4000元の都市・農村住民年金を追納しました。それにより、現在は毎月198元（約4300円）を受け取ることができます。彼がこの年齢で故郷に戻っても、畑の草むしりや農薬散布しかできず、1日最高でも80元しか稼げません。1ヶ月丸々働いても、せいぜい2400元です。



昼食は部屋に戻って食べる

周文青さんは心の中で、いつか本当に体が持ちこたえられなくなったら、その時は故郷に戻って鶏を飼ったり、野菜を育てたりするしかない、と割り切っています。

## 「10人のうち9人は契約を結ばない」

5月12日のこの日、午前6時。王景明さんは朝食を食べ終えた後、市場には向かいませんでした。彼は北六環路に隣接する馬坊村から出発し、バスに乗り、さらに地下鉄に乗り換え、2時間近くかけて北二環路に到着しました——彼は、未払いの給与を請求しに来たのです。

少し前、ある手配師から、施主の家の壁面にモルタルを塗る仕事を頼まれました。日給は500元。仕事が終わった後、手配師は数日後に新しい仕事があるから、スケジュールを空けて待っていてほしいと言いました。王景明さんはそれを断り、その後相手に連絡を取ろうとすると、手配師は言い訳をして工賃の支払いを引き延ばし始めたのです。

王景明さんはどうしてもなくなり、仕方なく施主の家を直接訪ねました。施主は彼の目の前で手配師の携帯電話に電話をかけました。「（施主は）お金をあの人に払ってあげなさい、働いてもらったのにどうして払わないんだ？と言ってくれたんだ」。電話が切れてから間もなく、手配師から工賃が振り込まれました。「彼（手配師）も（施主の手前）払わざるを得なかったんだよ」。

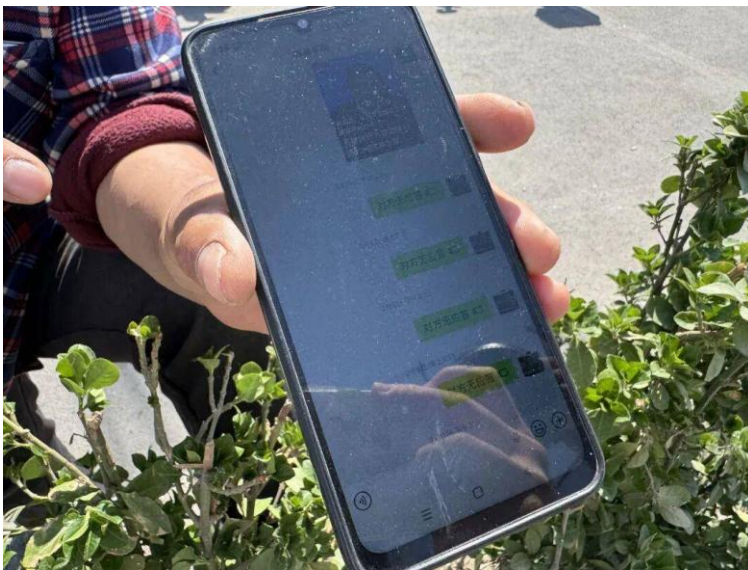
以前、別の給与請求の際、王景明さんはある手配師と連絡が取れなくなりました。最終的に彼は仕事を行ったマンションを突き止め、施主にこう告げました。「今夜、私はこのマンション内でレンガを浸すバケツを叩いて音を鳴らします。誰かが工賃を精算してくれるまで叩き続けます」。施主はそれを聞いて大慌てし、施工会社にプレッシャーをかけました。「もし王さんがバケツを叩いて騒ぎを起こしたら、お前たちを訴えるぞ」。その結果、30分もしないうちに、3000元余りの工賃が口座に振り込まれました。

「どうして毎日しつこく給与の支払いを求めるのか。それは私たちが恥知らずだからではなく、騙されてきたからなんです」。率直な性格の高樹琴さんは、憤慨した様子で声を荒げました。

労働者が施主から直接仕事を請け負うことは非常に難しく、必ず手配師や現場監督の仲介に頼らなければなりません。この依存関係こそが、日雇い労働者を価格交渉や権利の面で受動的な立場に追い込んでいます。

市場にいるほぼすべての労働者が、給与未払いの経験を持っています。誰もが仕事を急いで探しているにもかかわらず、手配師が「長期の労働者」を募集していると聞くと、集まっていた労働者たちはたちまち散っていきます。「日当払いでなければ働かない」。誰もが、最後に働いた分が水の泡になることを恐れているのです。

周文青さん曰く、給与の未払いという問題は「とっくの昔に頭の中で擦り切れてドロドロのスープになってしまった」ほど頻繁に起きるため、時には気にならなくなることもさえないといいます。彼にはまだ3万元以上の工賃が未回収のままです。手配師が電話に出たりメッセージを返したりして、たと言えい訳ばかりであっても、連絡がつくうちはまだ心に少しの余裕があります。一番恐ろしいのは、連絡が完全に途絶えてしまうことであり、「そうすると全く希望が持てない」のです。



周さんには6000元の未払い賃金があるが、2025年1月以降、手配師と連絡が取れていない

以前、周文青さんも弁護士を探そうと考えたことがありましたが、数日でその考えを打ち消しました。当時、周文青さんは市場である労働者からこんな話を聞きました。ショート動画プラットフォームで、出稼ぎ労働者（農民工）の給与回収と権利をサポートすると謳う弁護士の動画がよくお勧めに出てくるため、その労働者が連絡を取ってみたところ、相手はいきなり2万元の手付金を要求してきたというのです。「（ボスが）私に滞納しているのは全部で数千元の工賃なのに、弁護士は2万元の手付金を求める。私は一体どこからその2万元を出せばいいというんだ？」。

日雇い仕事の多くは臨時的かつ一回限りのものであるため、大部分の労働者は会社と契約を結んだことがありません。これが権利擁護をさらに困難にしています。

王景明さんは、日雇い労働者が手配師について働くのはすべて口頭の約束に基づいているといいます。「わずか1〜2時間しかしない短期の仕事もあるのに、どうやって契約を結ぶんだ？」。彼が話し終えるや否や、隣にいた別の労働者が言葉を挟みました。日雇い労働は不安定すぎて、今日はこの手配師、明日はあの手配師という具合に変わるため、「10人のうち9人は契約を結んでいない」のが実態です。



ある労働者は労働仲裁を試みたことがあります。窓口の職員から「契約書はありますか」と言われ、一気に氣力を失ってしまいました。多くの労働者は複雑な仲裁プロセスに対応することができず、最終的にはほとんどが泣き寝入りとなります。「そんな時間があるなら、1日働いたほうがマシだ」。



内装工事の技術の質についてマンションの家主から質問を受ける周さん

高齢の移住労働者にとって、日雇い労働は彼らの出稼ぎ人生における「終着点」です。朱同川さんも、自分がいつまで北京に留まるかは分からないと言います。「ずっと働き続けるかもしれないし、今日の午後には去るかもしれない」。

不安に満ちた表情の労働者たちの中で、周文青さんは数少ない、笑顔を浮かべている人物です。何十年もの仕事経験から、彼は春の時期が内装業界の閑散期であると分析しています。旧正月が明けて着工する初期段階では、多くの請負業者がプロジェクトの交渉や契約書の締結に追われ、労働力の需要が解放されるのが遅くなります。また、商売をしている施主たちも、春の利益が出て初めてリフォーム計画を始動させることが多いのです。

「もしかしたら、6月1日以降になれば少しは良くなるかもしれないね」。周文青さんは再び、彼のトレードマークである笑顔を見せました。

(※文中、周文青さんを除き、他のインタビュー対象者はすべて仮名です)



## 【記者の手記】

取材の日、私たちは午前 5 時半に北七家建材城の外にあるこの日雇い市場に駆けつけましたが、それでも遅すぎたことに気づきました。交差点にはすでに、多くの仕事を待つ労働者たちが立っていたのです。

7 時になると、ここには「運試し」をする人々の姿で溢れていました。3〜5 人で集まり、眉をひそめてため息をつく者もいれば、1 人で角に立ち、一言も発しない者もありました。しかし、スピードを落とした自家用車が通り過ぎるたびに、彼らの目には一瞬だけ光が宿るのです。

私たちは王景明さんに付き添って 3 時間待ちましたが、時間が経つのが非常に遅く感じられました。ふと時計を見るとまだ 9 時前で、この時間は多くの人々がようやく通勤の途についた頃でしょう。

人混みの中に立っていると、仕事への期待が、太陽が昇るにつれて少しずつ色褪せていくのをはっきりと肌で感じることができました。

この日雇い市場は、氷山の一角にすぎません。国家统计局の最新データによると、2025 年における中国の移住労働者（農民工）の総数はすでに 3 億人を超えており、そのうち 50 歳以上が 32%を占め、その規模は 9600 万人を超えています。

現在、このグループは「進退極まる」困境に陥っています。農村に戻れば、年金などの老後保障が不足しており、晩年の生活を支えることが困難です。都市に留まれば、年齢やスキルの制限によって正規の労働市場から徐々に疎外されてしまいます。そのため、この「十字路」が彼らにとって漂泊の旅の「最後の駅」となっているのです。

北七家市場の、平均年齢が 55 歳を超えるこの住宅内装労働者たちの多くは、20〜30 年の建築業界での経験を持っています。彼らは異なる種類のセメントの凝固時間を正確に言い当てることができ、手触りだけで壁面の平整度を判断することができます。しかし、現在の生活がかかった日雇い市場において、これらの経験は、時に「肉体労働ができればそれでいい」という一言に還元されてしまうのです。

契約もなく、社会保険もありません。彼らの職業的アイデンティティは、「左官」「大工」「塗装工」「雑工」という言葉に簡素化されています。

彼らはオンラインのプラットフォームを使いこなすことができず、見知らぬ求人情報も信用していません。仕事を獲得するためのチャンネルは、今でも「誰が今日仕事を見つけたか」「どのボスが給与を滞納しないか」という口コミの伝達に頼っています。彼らにとって、規範化されたサービスは遠い世界の概念のようであり、今最も差し迫っているのは、今日食べるための金を稼ぐことなのです。

したがって、都市の片隅に置かれたこのグループに対して、どのようにしてもう一つの雇用ルートを提供し、もう一層の権利のセーフティネットを敷き、もう一つ多くの社会の温もりを届けるかということは、深く考えに値する民生（国民生活）の重要な課題です。